

六字真言の觀法化について

——韓国における六字真言の受容と觀法化を中心として——

許 一 範

1. 六字真言の受容

六字大明王真言即ちオム・マ・ニ・パド・メ・フムという六字真言は現在韓国の中で広く持誦されており、またそれは觀法化され、修行法として定着している。

ここではこの真言の受容と觀法化について考えて見ることにする。

まず六字真言について説かれている文献的な典拠になる經典には『大乘莊嚴寶王經』¹⁾がある。この經典は除蓋障菩薩の質問に対し、釈尊が答える形式になっており、その中には六字真言を得る因縁と功德及び觀音菩薩だけがその明呪に住すると説かれている。

次にチベットに伝わっている『マニカンプム』という書物を挙げることができる。その中には十万の法語、阿彌陀仏と觀音菩薩の教勅などについて記されており、これはチベットの觀音信仰について説くものにしてチベットの中では六字真言の由来と功德について説く書物として重視されている。

また『大乘莊嚴寶王經』及び『マニカンプム』と密接な関係にある『聖觀自在求修六字禪定』²⁾がある。これは中国の中で元時代の以前にはすでに成立していたとされており³⁾、その中には六字真言を觀想すると五仏を成就し、六道の衆生を救済し、六波羅蜜を成就することができると記されている⁴⁾。以上のことにより六字真言は觀音信仰と密接な関係にあり、チベット並びに中国において信仰されたことがわかる。

特に韓国の場合は六字真言が展開して行く過程の中でその真言の一一の種子にそれぞれの仏菩薩を当てはめ、それらに新しい意味を附与している。即ち韓国における六字真言はただの觀音菩薩の真言だけではなく全ての仏菩薩の真言を代表する真言として展開していったのである⁵⁾。

以上のような考え方は『守護国界主陀羅尼經』の中に“唵字は毘盧遮那仏の真

身であり、唵字は一切陀羅尼の母である。したがって一切如来を生ずることができる。如来より一切の菩薩が生ずる。菩薩より一切の衆生乃至すべての善根が生ずる”⁶⁾と説かていること、及び『聖観自在求修六字禪定』の中に“この真言はすべての仏の母である”⁷⁾という記述、また『六字靈感大明王經』の中に“これは真言陀羅尼中の第一になる真言である”⁸⁾と記されていることとの關聯性を持っていると思われる。

とりあえず韓国の中で六字真言に関する信仰は古くから行なわれており、その特徴を持っていることが分かる。

さて韓国における六字真言に関する文献が最初に伝わられた時期について考えてみたい、今のところでは参考文献として初彫大藏經と高麗史を挙げることができる。その中で A.D. 1050年最初に作られた高麗大藏經の場合は多くの部分が失なわれており、A.D. 1236年から A.D. 1251年にかけて作られた二番目の高麗大藏經を参考することができる。

この二番目に作られたものには六字真言の典拠になる『大乘莊嚴宝王經』が入っている⁹⁾。

また『高麗史』について注目しなければならない。即ちその中には“丙午3年3月契丹から大藏經が送られた時王はていねいにそれを迎えた”¹⁰⁾という記録である。

この記述の中で六字真言と關聯性があるところは見当らないけれどもチベットと近い契丹から大藏經が送られたということより『大乘莊嚴宝王經』或いは六字真言がその時、伝えられたのではないかと考えられる。

ここでわれわれは以上のような文献的な典拠を持って六字真言の韓国伝来を11世紀中半から13世紀中半とみることができる。

2. 六字真言の観法化

それではまず韓国における六字真言の展開について考えてみるとにする。現在まで残っている文献或いは遺物の中でその典拠になるものには初めに『真言集』を挙げることができる。ここで『真言集』とは真言陀羅尼を集めて編輯したものである。現在残っている『真言集』の中で一番古いものは A.D. 1218年高麗時代開国寺において作られた『梵書総持集』である。またその次に A.D. 1463作られたこの真言集の写本には六字真言が現われている。さらにこれは A.D. 1569年に再び編輯され、A.D. 1800年まで何回も発行されている。

二番目には儀軌類を挙げることができる。その中で『聖観自在求修六字禅定』の場合は中国の中で作られたものが韓国に受け入れられ、A.D. 1560年朝鮮時代に再出刊されている。次に『観世音六字大明王神呪経』は『聖観自在求修六字禅定』に真言の布字念誦法と六字観音念図を加えたものであり、A.D. 1908年に作られた。

その他にも A.D. 1649年の『法性偈図』¹¹⁾に入っているもの、A.D. 1640年の変相図¹²⁾などに入っているものなどがある。

また遺物には香炉¹³⁾、瓦¹⁴⁾、梵鍾¹⁵⁾などにぎざまれている多くの六字真言の梵字がある。まず香炉にぎざまれているものの中で一番古いものは A.D. 1177年に表忠寺において造られている。また瓦にぎざまれているものには長谷寺のものを初め、朝鮮時代に建てられている多くの寺院の中で見つけることができる。その次に梵鍾にぎざまれているものの中で一番古いものは A.D. 1157年に造られたものである。その外にも塔¹⁶⁾、鉢¹⁷⁾などにぎざまれているものなどがある。

われわれは以上のような書物並びに遺物を通じて高麗時代から朝鮮時代にかけて六字真言が広く流布されたことが分がる。

それではこのような六字真言がどのようにして修行法に受け入れられたのかについて考えてみよう。

まず韓国における六字真言の持誦法はその真言を五仏、五方に配当し、観想する観念真言としての特徴をもっている。このような六字真言の観念真言化の教義的な根拠になるものには六字に五仏と持金剛菩薩を配当し、それぞれの種子に意味を附与する『聖観自在求修六字禅定』¹⁷⁾及び五仏を五方に配当し、身の五カ処に観ずる六字の観想法を図にして表わしている『六字大明王神呪経』¹⁸⁾がある。

またこのような根拠をもって A.D. 19世紀中半の白祥奎という人物は『六字靈感大明王経』の中で“オム字は本性を表わしている。これを中方毘盧遮那法身の覚りといい、マ字は毘盧法身の大用性を表わす。東方は不動尊の覚りといい、ニ字は中道を表わしている。南方は宝生仏の覚りといい。パド字は体大を表わす。西方は無量寿仏といい、メ字は万物が本源にもとつていくことを表わしている。北方は不空成就仏といい、フム字は大執金剛及び金剛持といい、この六字はすべて微妙本心である”¹⁹⁾と述べている。

また以上のような考え方は19世紀末から20世紀の初めになって修行法として観法化され、韓国に定着することになる。

このようなことはここで一歩進み、「自己観音密呪観念図」という観法に展開

していく。即ちオム字の毘盧遮那仏は中方にしてへそ、マ字の阿闍仏は東方にして左のわきした、ニ字の宝生仏は南方にしてむね、パド字の阿弥陀仏は西方にして右のわきした、メ字の不空成就仏は北方にして丹田、フム字の執金剛は間方にしてのどに配当している²⁰⁾。19世紀中半から20世紀初めにかけて活動していた白竜城は彼の『六字大明王経の持誦法』の中でオムマニパドメフムの六字を眼耳鼻舌身意の六根に配当し、六字真言を念誦すると六根を通じて宇宙法界に達することがきる²¹⁾と述べている。

以上のような修行法の流れは今世紀の前半に登場する孫奎祥という人物により、真覚宗という一つの宗派に展開していったのである。

- 1) 大正, 20, p. 47.
- 2) 朝鮮朝, 明宗15年 (A.D. 1560) 開刊本。
- 3) 韓国密教思想研究 (東国大学校仏教文化研究院, 1986) p. 555.
- 4) 朝鮮朝, 明宗15年 (A.D. 1560) 開刊本, pp. 55-76.
- 5) 大韓仏教真覚宗, 海印行, 真覚教典, p. 49.
- 6) 大正, 19, p. 565下, “唵字即是毘盧遮那仏之真身, 唵字即是一切陀羅尼母也, 從此能生一切如来従如来, 生一切菩薩, 従菩薩生一切衆生乃至分所有善根”
- 7) 朝鮮朝, 光海君13年 (A.D. 1621) 開板本, p. 33, “此真言諸仏之母也”
- 8) 白竜城, 六字靈感大明王経 (京城, 三蔵釈会, 昭和 12), p. 1.
- 9) 韓国密教思想研究 (東国大学校仏教文化研究院, 1986) p. 567.
- 10) 高麗史, 世家卷第八 (文宗 2 年) “三月丙午 (A.D. 1063) 契丹送大蔵経王備法駕迎干西郊”
- 11) 朝鮮朝, 肅宗 2 年 (A.D. 1649), 韓国全羅北道 金山寺本。
- 12) 朝鮮朝, 仁朝18年 (A.D. 1640), 智異山 靈源庵開板本, 双溪寺所蔵。
- 13) 表忠寺 (A.D. 1177), 長谷寺 (A.D. 1379), 表訓寺 (A.D. 1368) 等のものがある。
- 14) 東国大学教学術調査団, 江華島学術調査団報告書 第一輯, p. 38.
- 15) 正豊二年銘銅鐘 (A.D. 1157) を初め, 奉先寺 (A.D. 1469), 麻谷寺 (A.D. 1653) 等のものがある。
- 16) 韓国 光州 澄心寺七層石塔 (17C 末)
- 17) 粉青沙器彫花梵字文鉢 (16C)
- 18) 朝鮮朝, 明宗15年 (A.D. 1560) 開板本, pp. 41-42.
- 19) 朝鮮朝, 明宗15年 (A.D. 1560) 開板本, pp. 8-11.
- 20) 観世音六字大明王神呪経 (隆熙 2 年, (A.D. 1908) 重刊本, p. 25.
- 21) 白竜城, 六字大明王経持誦法 (京城, 三蔵釈会, 昭和12), pp. 2-3.

〈キーワード〉 六字真言, 観法, 観念図

(真覚大学教授)